

△▼ 在外研究報告 ▼△

Hawai'iで出会った「日本人」：観光客が消えたホノルルで

菊地 恵太

2019年9月から約1年間、在外研究でハワイ大学マノア校にお世話になった。最初の数カ月は大学から徒歩15分ほどのマノアという街に住み、その後はワイキキのコンドミニウムに移った。ワイキキから大学までは市バスで30分ほどだ。3月末まではほぼ毎日大学に行き、研究生生活の合間に院生向けの授業にも参加させてもらっていたが、その後、大学が閉鎖され、すべての授業がオンライン化された。幸い、研究員はキャンパスに立ち入ることができたが、大学から人がほぼ消えた。4月からのほぼ半年、ワイキキと大学の行き来と朝の日課であるランニング、食料品の買い出し以外は外出ができない日々が続いた。

当初の予定では、5月から8月の間はアメリカ本土で行われる学会や研究会に赴く予定であったが、それができなくなった。また日本との直行便も全くなり、観光客のいなくなったホノルルで8月に臨時便が月に4便だけ出るまで研究生生活が続けることとなった。そんな最中、私が研究生生活の合間に何を感じ、何を学んだのかを本稿では報告したい。

私がハワイ大学に在籍するのは実は2度目であった。写真1に写っているのは1998年から2000年まで修士課程に通った際にルームメイトだった友人たちと撮った学位授与式の時の写真である。この友人のうちの二人は私とほぼ同年齢の

日系人でそれぞれIyamatsu, Hanaiという姓を持っている。ちなみに今回の滞在中オフィススペースを提供してくださり、とても親切にしてくださったハワイ大学の教員であるKent Sakoda氏の姓はSakodaである。ハワイにはこうした日本国内でも存在する姓を持った人たちとよく遭遇する。彼らは戸籍上はアメリカのパスポートを持つアメリカ人で英語を母国語とし、日本語はほぼ話せない。前回、ハワイに住んでいた時にはそれほど意識しなかったのだが、今回の滞在中でハワイに住む「日本人」のことを考え、また自分の日本人としてのアイデンティティを考えるようになった。

ロックダウン中、ワイキキの自宅にいとある土曜日にアラワイ運河の向こう岸にあるイオロニ高校でグラウンドにたくさんの自家用車が並ぶ卒業式をやっていたことがあった。卒業生の名前をマ



写真1 ハワイ大学大学院の学位授与式にて(2001年5月)

イクで呼んでいる音声家が家の中にもよく聞こえてきたのだが、その時多くの日本名の姓を耳にした。その際はミドル・ネームも読んでいくのでとても不思議な感覚を持った。例えば、Kent Keiji Sakodaのようにハワイの日系人はほぼ多くの音が日本語である名前を持っているのである。

日本人現地スタッフが常駐するホテルや、HISやJTBといった日本語が通じる旅行代理店、そういった日本人向け観光産業に支えられ多くの日本に住んでいる人はパラダイス的な感覚をハワイに持っているだろう。写真2は朝のランニングの途中、帰国前に8月にワイキキで撮った写真だが、綺麗な白砂のビーチやヤシの木は観光のために造成されたものだ。そういった「作られた」イメージを持ち、ハワイを訪れる観光客は少なくないであろう。一方、そんなワイキキは地元の人たちにとっては、日常とは異なる別世界なのである。観光客が多く、レストランもスーパーも地元の人たち御用達のものと比べると高めで、地元の人たちと話してもみな口をそろえてワイキキには何の用もないのでめったに足を運ぶことはないという。

さて、ハワイでは3月後半から外出禁止令が出て4月ごろからは日本からの観光客が消えた。観光業に携わる多くの人々は失業状態である。そんな最中、予定を早めて日本に帰国しようかとも



写真2 WaikikiのHilton Lagoon付近で撮影した虹

思ったが、空路が寸断された状態で私はそれもあきらめた。初めのうちは不安でいっぱいだったが、しばらくして慣れてきてからは観光客がいなくなったハワイをどうやって楽しむかを考えるようになった。

ロックダウン前のある時、友人のHanai氏の自宅に夕食に招かれた。彼の奥さんは沖縄からの移民の3世である。その際、そろそろ子どもをお風呂に入れないかというタイミングで奥さんが“Time for bocha for kids?”と友人に聞いていた。実はこの“Bocha”という単語を聞くのはその時初めてではなかったのだが、この言葉はいわゆるハワイピジン英語でBathを表している。ハワイピジン英語に詳しい前述のKent Sakoda氏に聞くとハワイには広島や山口といった山陽地方からの移民が元々多く、その人たちが使っていた言葉が今も残っているという。また、地元の日系人のためにハワイ大学近くで長年営業しているFukuyaといういわゆる惣菜屋やDon Quixote（日本のドン・キホーテ）でNishimeという料理を目にした。なお、ハワイでは日本語の弁当から来た“Bento”という語は定着しており、Nishimeは弁当のおかずとなる鶏肉や野菜やしいたけ、こんにゃくの煮物のことである。東京出身の私にとってNishime（煮しめ）は正月に食べるお煮しめのことを示すのだが、いわゆる筑前煮のような煮物が煮しめと呼ばれていることに驚いた。同世代のAaron Hanai氏に僕の好物はNishimeだと言ったら「老人みたいだ」と笑われたが、比較的高齢の日系人の人たちがこれを注文しているのを目にした。

大学院生だったときは英語で論文を読み、論文を書くといった活動ばかりしかしていなかったのでも全く気にしていなかったのだが、今回の滞在では日本からの移民の歴史に興味を持ち、少し調べてみた。2020年3月まで毎日定期便が日本の東京、名古屋、大阪とホノルルを結んでいた。そんなハ

ワイと日本を結ぶ定期航空便が開始したのは戦後すぐの1954年2月のことだった。それからさかのぼること100年ほど前の1868年（明治元年）時代に砂糖農場で働くためにやって来た移民が日本とハワイとの歴史の始まりだったという。そのころ日本から船で1カ月以上かけてやってきた移民たちは「元年もの」と呼ばれている。東京を夜10時ごろに出ると翌朝にはホノルルに7時間ほどかけてついてしまうこの時代からすると信じられないほどの長い船旅である。そういった長時間の船旅でやっとハワイにたどり着いたそのころの日本からの移民は長時間の過酷なサトウキビ畑での労働に耐え、少しづつ数を増やしていった。ハワイ政府観光局のサイト（<https://www.aloha-program.com/curriculum/lecture/detail/189>）に記載されている統計によれば、1918年（大正7年）にはハワイにおける日系人口は10万人を超え、1924年（大正13年）のサトウキビ農園における日系人口は全体の70%に達するほどだったということだ。新型コロナによる感染症予防のための都市封鎖の中で気持ちが沈みそうな私にとってそういった過去の日本人の歴史を改めて知るとはとても励みになった。友人のAaron Hanai氏に彼と奥様のFamily Treeを書いてもらった。以下に示したが、多くのハワイに移住した日系人は彼らのように日本人同士で結婚をし、子孫を残してき

たようだ。

昨今、現代の私たちは海外滞在先で普段と違う日常を体験し、消費をするという今までの海外旅行ができなくなった。現代の日本人は観光でホノルルに来るとガイドブックやテレビ、あるいはYouTubeなどの動画サイトで紹介された場所に訪れ、飲食をし、お土産を買い、数日後に帰国するという「プログラム」を楽しんできた。観光客が消えたホノルルで改めて思い出させられたのはサトウキビ農園での重労働に耐え、いくらかの富を蓄え、ハワイに子孫を残していった明治時代から移民してきた日本人たちのことである。写真2ではワイキキの海に早朝の雨の後に虹と満月を見ることができる。ホノルルではほぼ1カ月で満ち欠けする月を毎朝のように海で見ることができた。明治元年にやってきた「元年もの」の日本人は100名ほどだったという。その人々もきっとこういった空を日々見上げていたことであろう。

帰りの飛行機はほぼ満席であった。何カ月も待ち、2週間の自主隔離をしても日本に戻りたいという多くの人であふれた便で羽田にやっと着いたときは安堵の気持ちがこみあげてきた。また同時に6000km以上離れたホノルルの街を思い出し、今度行けるのはいつの日になるだろうかとさみしい気持ちにもなった。写真4では、左下にハワイ大学マノア校、中央にダイヤモンド・ヘッド、右

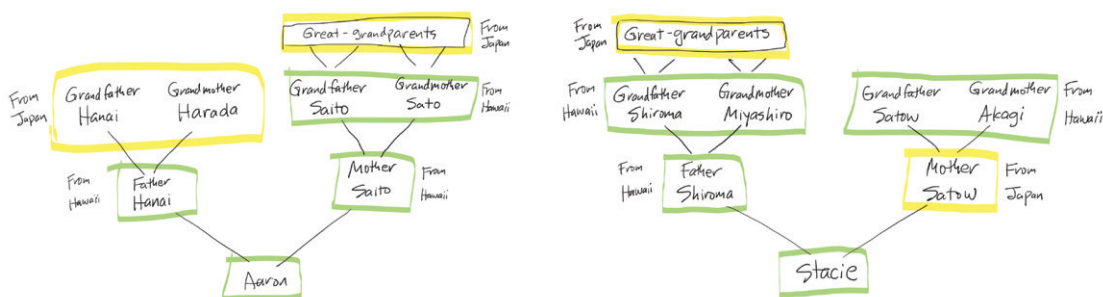


写真3 Aaron Hanai氏ご夫婦の家系図（Aaron Hanai氏提供）

上にワイキキの街を見ることができる。こんなに高いビルが立ち並ぶホノルルになるとは明治時代にやってきた日本人は想像できただろうか。今から振り返ると、多くの人々の存在が今の私たちを支えていることに気が付き、自らが歴史の1ページを刻んでいくことの意義を改めて考えさせられたそんな1年だったと思う。改めて今回の在外研究を可能にしてくれた様々な方々に感謝の意を表し、筆をおくこととする。



写真4 Tantalus Lookoutから見下ろす
Diamond HeadとWaikiki

